

第二期 第九十七号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.08.10 定有堂書店 発行

マトリョーシカ

「本のある場所」日記 二〇二四年七月

コロールとペリリュエ

神田神保町の青空

魔女と言えば、猫

文字をながめる日記

いま、創られたつある本屋、あるいは「ローマを…

本を作る側から (17)

汽水のほとりから (41)

ウッドストックと昭和男

因幡に還る (後)

鳥取あれこれ その九十六

内坪井町日記 (3)

文化のある場所？

やっぱりめがねが好きだ

二)案内

奈良 敏行

南院楼綾繁

岩田 直樹

木元 健二

山下 篤美

鳥居貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラマメリア

マトリョーシカ

奈良 敏行

(定有堂 主人)



七月一九日(二〇二四)大阪市淀川区の塚本駅で三砂慶明さんと落ち合った。三砂さんの知人の田中慶一先生が、塚本なら「ハートコーヒー」のドーナツだよとお教え下さり、期待に胸を膨らませて駆けつけた。いつものように話が長くなり結局四力所はしごした。

三砂さんは『町の本屋』という物語』を造ってくれたのだが、もう一冊刊行を考えてくれている。その相談もした。

『町の本屋』の評価は、三砂さんが古い原稿を拾い集め、取捨選択し残してくれたという一事に集約されている。四十三年の営みを圧縮して、「町の本屋」という理解しやすい主張に変換してくれた。ほとんど一心同体というところまで心を開き合ったからできた「圧縮」だと思う。わたしはちよど「ドウルズを読む会」を始めたところだったので、勢いで「わたしたちはドウルズとガタリみたいだね」とわかるようなわからないような、恐れ多い例えて三砂さんに語ってしまった。それほど不可分なところがあったのだ。わ

たしには本屋の閉店という差し迫った業務があり、あれこれ廃棄することしか頭になかった。そのかたわらでわたしの古い原稿などをダンボールに取りまとめ持ち帰ったのが三砂さんだった。

わたしの書き残したものは存在していたが、わたしはもう存在していなかった。ノンフィクションの素材として古い書きモノを用いてくれるのかと思っただが、わたしの著書として残したいというのが三砂さんの結論だった。条件をつけた。遺稿集という形だったらいいですよ、という強い意志だった。だから何一つ手を入れることもなかった。三砂さんは周囲に、過ぎ去った事実関係を問いただして回り、三十歳離れた自分の世界観のもとにまとめてくれた。編集というよりも再創造に近い。

二冊目は本当の遺稿集になるのではないかとという予感がある。予感がするから三砂さんがわたしの「ことば」を残してくれるのはうれしい。七月の塚本では再び希望のような条件をつけた。三砂さん署名で「まえがき」と最後に「編者謝辞」を書き添えて欲しいという二点だった。一心同体だからとも付け加えた。遺稿集見立ての本だから、見送る人に見送りの辞を記して欲しいという、わたしとしては当然の願いだっただ。うまく伝わったかはわからない。

わたしは、二人の関係はマトリョーシカみたいだね、と思

いつきを口にした。

二冊目の本は「音信不通」の連載が中心となる。数本の書き下ろしも加わる。わたしは日頃から「小さい声を外部が解釈すると別のものになる」と頑なに主張しているの、「身の丈に完結している」文章を他人が必要とするとは信じられない。三砂さんはいつも、「大丈夫です」と力つけてくれる。二人は一心同体だが、出力のあり方が少し違う。三砂さんはコンバーター(変換装置)なのだ。わたしの世界は自己撞着しているので他者を本当のところ必要としていない。三砂さんはいつも届け先のことを念頭に置いて考える。このコンバーター装置がマトリョーシカの外層なのではないだろうか。わたしはその中にくるまれている。だから生まれようとしている書物もマトリョーシカのような欲である。わたしの遺文が、届け先を得て、同じような自己撞着した魂に届くと少しうれしい。それは祈りのようなものかも知れない。

わたしはオブセッションを反復して「ことば」にする。三砂さんに、あえてわかりにくいのを承知で、「シャンソン」のよなものだと例えてみせた。シャンソンは恋々とオブセッションを歌う。金子由香利が歌う「スカーフ」が好きだ。本をいつまでも読みつづける。七十五年読みつづけ、もうすでになぜ読みつづけるのかも忘れてしまったいま、そこには本へ

の依存症としか呼びよのない夢の残滓、本への愛が残る。愛は依存症なのだ。「スカーフ」が歌う。「淋しさに 今も残る ぬくもりよ」。わたしには「本」への切々した愛の「ことば」に聞こえる。クミコが歌う「スカーフ」のあがた森魚の詞は、「テラスでエロスのワルツを踊った」「時代(とき)は変わろうとしていた」「理想に立ち向かう者として 生きるものは生き残り 死ぬものは死にゆく」と歌う。わたしには「本」へのオプセッションに聞こえる。「本」への愛はオプセッションとして告げるほかにすべを知らない。だからシャンソンなんだと三砂さんに語る。「思考」は「重み」と「方向」を持つ。わたしの自己撞着は方向を持たない。だから「思索(パンセ)」なのだ」と区別してみたい。深みへと沈みゆくだけだ。二冊目の本は『本屋のパンセ』ではどうか?と心に思う。副題は「定有堂として」「音信不通」だろうか。三砂さんのコンバーター・マトリョーシカにくるまれて、「まえがき」と「編者謝辞」を三砂さんの署名にて仕上げてもらえたら幸いだと思っている。

2024.07.22

(参考)

奈良敏行+三砂慶明『町の本屋という物語―定有堂書店の

43年』作品社 2024

田中慶一『大阪喫茶店クロニクル』淡交社 2024

読書会 『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

定有堂教室「読書室ヒオトープ」

8月8日 木曜日 第14回 19時から

テキスト 奈良敏行+三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』作品社
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

8月27日 火曜日 19時から

テキスト 関口正司『J.S.ミラー 自由を探究した思想家』
中公新書 2023

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

8月20日 火曜日 19時から

テキスト 浅田彰『構造と力』中公文庫
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

「本のある場所」日記 二〇二四年七月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

7月13日

夜、YouTube「不忍ブックスストリームⅡ」の配信を行なう。

2010年11月、当時あったUstreamというプラットフォームで始めた配信が「不忍ブックスストリーム」だった。ネット関係に疎い私に代わって、配信に関する諸々を担当してくれたのが、不忍ブックスストリームの実行委員だった鈴木喜文さんだった。

不忍ブックスストリームの動きを伝えるという名目はあったが、実際には私が気になっている本周りの人びとをゲストに呼んで話を聞いた。月に一度、スタジオトンプリン（鈴木さんの自宅）や根津の〈タナカホンヤ〉に出演者が集まり、配信を行なった。その前にゲストと一緒に近所の定食屋などでちょっと飲みながら話すのも楽しかった。年末には鍋を食べながら、「今年の一冊」を紹介しあったりもし

た。

いろんな人と知り合えてよかった一方で、毎回、それなりに準備をしなければならず、その日になると出かけるのがおっくうになったりした（いざ始まると楽しくなるのだが）。当時これとは別に、千駄木の〈ブーザンゴ〉というカフェで、毎月ゲストを招いて「不忍ブックスストリームの茶話会」をやっていた。いまからは信じがたいパワーだ。それらが段々面倒くさくなって、不忍ブックスストリームも茶話会も2017年1月で終了。ブックスストリームは全123回もやったのだった。

そんなことをやっていたことも忘れていた2020年春、新型コロナウイルスが蔓延し、新刊書店や古書店が休業に追い込まれ、一箱古本市などのブックイベントも中止せざるを得なくなった。その状況下で、何かできないかと思っ

て鈴木さんに相談し、5月からYouTubeで配信を始めた。前のシリーズを引き継ぐ意味で「不忍ブックスストリームⅡ」というタイトルに決めた。

自宅のパソコンからZoomでつないで話したことが、YouTubeで配信される。直接会う必要がないので、地方在住の人にも出演してもらえらる。コロナ禍の真っ最中には本屋や映画館の人に出てもらい、本音を聞くことができた。以前のようなパワーはないので、集まってもらわ

なくても済むのは気が楽だ。これも「本のある場所」のひとつのかたちだと思っている。

最初のうちは見せ方に気を遣う余裕がなかったが、YouTubeを見まくっている池袋の〈古書往来座〉の瀬戸雄史さんが「押しかけアシスタントディレクター」に就任してからは、少しずつだがYouTubeらしくなっていた。もともと、ほぼおっさんだらけの画面であることには変わりないが。

55回目となる今回の特集は「発進！へアジア文芸ライブラリー」。ゲストは翻訳家の中村加代子さんと春秋社の荒木駿さんだ。

中村さんは不忍ブックストリートの初期からの実行委員。台湾人の母と、台湾人と日本人の間に生まれた父を持つ。台湾の本に関する情報を日本に発信するユニット「台湾屋 tai tai books」のメンバーで、『台湾レトロ氷菓店』（グラフィック社）などの訳書もある。不忍ブックストリームにはⅠにもⅡにも出てもらっている。

その中村さんが翻訳したのが、朱和之『南光』。日本統治下の台湾に生まれ、留学先の日本で写真にめざめた南光こと鄧騰輝の生涯を描く長編小説。古い習俗や祭祀の残る実家と、モダン都市である東京や台北とのギャップの中で、

写真家としての道を進んでいく。ライカなどの写真機や撮影技法のディテール、南光の友人や家族の視点の導入など、読者を飽きさせない作者の工夫が盛り込まれている。

同書は今年4月からスタートした春秋社の「アジア文芸ライブラリー」の第二弾。同シリーズは「文学を通じてアジアのこれからを考える」というもので、チベット人作家のツェリン・ヤンキーの『花と夢』を第一弾、マレーシア出身のヴァネッサ・チャンが日本占領下のマラヤに暮らす家族を描いた『私たちが起こした嵐』を第三弾として刊行している。三冊とも読んだが、アジア文学になじみのない私にも興味深いテーマで、なおかつ文章が読みやすく面白かった。

このシリーズを企画した荒木さんは、大学院を卒業したあと春秋社に入社した。まだ若く、編集者としてのキャリアも長いとは云えないが、作品や訳者の選択、装丁や装画への配慮などが行き届いている。なによりも、読者にアジア作家のいい作品を紹介したいという熱意が、話から感じられた。こういう面白い人に出会えるのが、この配信のいいところだ。来月以降も無理せずに続けていきたい。

コロールとペリリュー — 洋上での「転向」(八)

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・「読む心」講師)

六 植民地支配の痕跡と激戦の地

コロール島で南洋神社の跡地を見たとき、私の幼い頃、祖母(一九七七年没)が戦前の女学校の地図帳を何度も見せて「日本はこんなに広がった。戦争に負けて小さくなってしまった」と嘆じたことを思い出した。高澤さんに「そう言えば、パラオに南洋庁があったのでしたっけ」と尋ねると、「若いのによく知っているな」という顔をされた。

二〇年後に読んだ西牟田靖『僕の見た「大日本帝国」—教わらなかつた歴史と出会う旅—』(情報センター出版局、二〇〇五年)には、「日本の足あと」植民地帝国の痕跡」を探す旅の様子が克明に記されていた。

私より八歳若い一九七〇年生まれの西牟田は、二〇〇〇年八月、サハリンの人口五〇〇人ほどの寒村ウズモリーエで「あまりに唐突な風景」を目にする。日本にしか存在しないと勝手に思いこんでいた鳥居が遠く離れたサハリンに残っていることに驚き、それまで考えてこなかつ

た日本の過去を初めて突きつけられた彼は、四年をかけて「日本の足あと」を探す旅に出る。

サハリン、韓国、北朝鮮、竹島、中国東北部(旧満州、なんとノモンハンまでも!)、ミクロネシア(旧南洋群島)。北緯五〇度の旧南樺太国境から北緯七度のパラオ・ペリリュー島まで、南北四五〇〇キロ、東西二五〇〇キロに及ぶ大日本帝国の版図を踏査する空前絶後の旅だ。西牟田は、イデオロギー抜きに淡々と旅を綴る。現地できざまな人と出会い、「日本の足あと」に触れ、帰国して歴史を詳しく調べ、また現地を訪れる、その繰り返し。戦後世代が教えられなかつた歴史を学ぶプロセスが、反日・親日のはざまの微妙な感情を掘り起こす。

西牟田が、サハリンで神社の鳥居に出会って衝撃を受けたのとは異なり、私はパラオで植民地支配に思いを馳せることはなかつた。日本語を話す年配の漁師さんに出会っても「へえー、日本語が通じるんだ」としか思わなかつたのだ。

そうそう、コロール島から全速力のモーターボートで一時間ほどかけて、小さな島に渡ったこともあった。真っ白な砂浜はサンゴが砕けてできたものだ、と先輩の茅野創さんが教えてくれた。地球温暖化が爆速で進む中、酸素を蓄える機能が注目されているサンゴ礁の専門家とし

て著名な研究者だ。

光り輝く砂があまりにも美しく写真に撮ろうとしたところ、「いくら撮っても、この美しさは保存できないよ。目に焼き付けなさい」と諭された。旅の間中、かなりの枚数の写真を撮っていた私は、この島の写真を一枚も撮らなかつた。その後、旅での写真撮影が億劫になったのは、この一言が遠因だったのかも知れない。

「このあたりの島には大勢の人が眠っているよ」と同行した誰かに言われたが、その意味が全くわからなかつた。ようやく理解できたのは『僕の見た「大日本帝国」』を読んだ後である。

ペリリュー島まではモーターボートで約一時間かかる、とあるから、私たちが訪れたのはペリリュー島付近の小島だったのだろう。ペリリュー島では一九四四年九月から一一月にかけて激戦が繰り広げられた。日本兵の死者は約一万人（最後には玉砕）、米軍の死傷者は約一万人、そのうち死者が二千人に及んだ。米軍の戦闘被害率は太平洋戦争有数の四〇〇％という高さだった。私はそんな歴史を知るはずもなく、夕方まで海水浴に興じた。海岸から一步でも陸に入ると、多数の若者たちが眠っているのにもかかわらず、である。（ユージン・スレッツジ『ペリリュー・沖繩戦記』講談社学術文庫、二〇〇八年、も参

照されたい。）

西牟田の本に刺激されて、植民地支配のことを知りた
い、と思った私は、無謀にもいきなり『岩波講座 植民
地支配と日本』（全八巻、一九九二―九三年、購入した
のは二〇〇五年第四刷）に挑戦し、所収の全八九本の論
文に丹念に目を通した。非専門家である私がどれだけ理
解できたかは心許ないが、それぞれの論文を「驚き」を
もって読み進んだことは事実である。

きわめて専門的な内容の本講座が、なぜ、植民地帝国
日本についての数少ない研究者以外の一般の読者に広く
受け容れられたのか。何となくわかつたつもりになつて
いた歴史の隠された実態が詳細に描かれ、読者の強固な
思いこみが次々に覆される体験の広がりが異例の増刷に
つながつたのだろう。

それ以降、植民地支配に関連した本を折に触れて読ん
できた。強く印象に残っている二冊を刊行順に挙げよう。
野村進『日本領サイパン島の一日』（岩波書店、二〇
〇五年）、寺尾紗穂『あのころのパラオをさがして―日
本統治下の南洋を生きた人々―』（集英社、二〇一七年）。

歴史健忘症に罹っている私たちの多くが、せめて一年
にひと月、八月に歴史を振り返ることは決して無駄なこ
とではあるまい。

神田神保町の青空

木元 健二

(新聞記者)

久々に青空を見た。といつても、この酷暑をもたらす空ではない。本誌主宰、奈良敏行さんの語る「本屋の青空」である。

七月の小雨の夕方、神田神保町の東京堂書店にふらり立ち寄った。この店の書棚には感服する。控えめな照明がありがたい。一階から三階まで回遊していると、水族館をすいすい泳ぐ魚になったような気分がわいてくる。

文化部で読書面の担当をしていた頃、この界隈の大型書店へ本を調達に行った。書評を綴る方々に最新の書籍を示すためで、交代で回ってくる役回りだった。店側が「候補作」として選んで見せる書籍は毎度、圧倒されるような点数だったと記憶する。敷衍して、どれほどの書籍が出回っているのかと思ひ至り、我が世界の狭さを知った。

その後、部署を変わり、地方への転勤をはきみ、書店に足を運ぶことがめっきり減る。それに、急ぎ必要な書籍資料はアマゾンで取り寄せ、すすむ老眼には画面の文字を拡

大できる電子書籍キンドルで応じている。そんな流れで、内なるリアル書店の存在感が薄くなってしまった。

先日訪れたのは老舗・東京堂だから、ともいえるが、まずは小説の棚をながめ、映画の棚へ。映画のタイトルから、評論・エッセーへ。文庫の棚もブアツイ。貧困なる発想もそれなりのヒントを得れば、ころころと弾みゆく。

「メディアア」と題する棚に、奈良さんによる『町の本屋という物語』が据えてあった。見上げる棚のおへそあたり、書影が見えるかたちでバツチリと。「旧友」との再会だ。ほっこりする。

かたわらに同作について綴った角田光代さんの書評(毎日新聞)のコピーがある。拙稿(朝日新聞読書面「著者に会いたい」)も張られていた。直木賞選考委員の文章と並ぶとは、落語家の真打ちと前座見習いの写真を同じサイズで刷るようなもの。何ともちぐはぐな感じがした。

ともあれ、しかるべき本屋を回遊する、という行為は刺激的なものだ。心の中の、あまり説明のつかない「有機的な世界」が通電する、とでも言おうか。もつと言えは「おれも生きてるんだナ」とふつふつと感じられるというか。

拙稿では奈良さんの「本屋の青空」を、こんな風に書

かせてもらった。

〈書棚を前に時を忘れ、遠くに思いをさせ、心が無限に広がる気分のこと〉。そのうえで定有堂の営みをへこういう生き方もあるのか……と重荷を下ろせるような。訪れる人にそんな見せ方を。「本屋は展示場でなく舞台だ」と努めてきた」と伝えた。改めて、あの青空の奥行きを想う。

「世界一の本の街」といわれる神田神保町の界限には百三十店の書店があるという。その豊穡な世界を歩くには、やはり腹ごしらえをしたくなる。名店が多いのはそのせいだろう。カレー店の激戦区で、四百店ほどが点在するという。関西育ちでイラチ(せっかち)の私とて欧風カレー「ボندي」の一皿には行列する。昭和風の町中華、という佇まいの店も目立つ。入るなり、メニューも見ずに「餃子とビール」と注文したくなる。うまいに決まっている。

東京堂では三冊購入した。あれもこれも欲しくはなかったが、こういう邂逅の折に「大人買い」をするのはおろかな気がした。ちいさな鰻屋に入り、瓶ビールをコップでやりながら、焼けるのを待つ。

まず手に取ったのは、二〇二三年末刊行の『新居格 随笔集 散歩者の言葉』(虹霓社)だ。にい・かく(一八八

八〜一九五一)。徳島に生まれ、東京帝大を出て新聞記者へ。文筆生活に至り、大正時代から評論や随筆などに筆をふるった。「モボ・モガ(モダンボーイ・モダンガール)」という流行語を造ったときれる。戦後初の公選杉並区長に担ぎ出され、生活協同組合(生協)の活動にも熱心な、市井の暮らしを大切にすると人だった。

編者・荻原魚雷の解説によると、含羞の人で、自分が文人や知識人と呼ばれることを恥じる気持ちすらあったとか。散歩と読書を生活の軸に人々と交わりつづけた。

〈わたしは、この世に散歩しに生まれて来たのかも知れない〉

人柄を映した、てらいのない文章に滋味がある。

ただ、これといった専門分野はなく、代表作といわれるような作品もない。古書で入手するのも難しい作家だった。解説はこう結ばれている。

〈没後もずっと読み継がれるような作家なんて、文学史の中でも一握りしかない。だけど、一握りからこぼれた作家にも素晴らしい文章を書く人はいる。新居格もそのひとりであろう〉

書くこと、出版することの意味を知らされる思いがする。

魔女と言えば、猫

山下 篤美

(魔女修行中)

魔女になるのが夢だと言ったせいか、ある朝庭に、野良猫が姿を現しました。「子猫がいるよ！」次女に声をかけている間に、その尻尾は叢へと姿を消しました。「もつと見ていたかったなあ」その時は、のんびりそんな思いに浸っていた私。

ところが、その日の夕方、今度は母猫が居間のサッシ越しに、うちの猫・ココと対峙しているではありませんか。更にはその後を追って、ワラワラ、ワラワラ4匹もの子猫が姿を見せたのです。

「ええええ、これって、どうすりゃいいの」状況が完全にキヤパオーバーでうろたえる私。まずは里親ベテランの友人に指示を仰ぎ、以下のミッションを打ち立てました。

1. 授乳している母猫の体力をつけるため、エサをやって、母猫を手懐ける。

2. 母猫を捕獲して、避妊手術を施す。

3. 里親を探して、乳離れしたら子猫は引き取ってもらう。

早速、保健所で、捕獲器を借り受けました。また、避妊手術の補助金(メスは1万5千円、オスは1万円)をもらうために、母猫の写真(未手術である証明、耳がカットされていない)を提示。動物病院に手術受け入れ可能なことを確認し、捕獲の許可を得ました。

その後は母猫との関係構築に向けて、朝晩エサをやり続けました。ある日には、一家は全く姿を現さなかったり、また別の日には、子猫の1匹が虫に刺されたのか、顔を腫らしていたりと、ソワソワ、ハラハラ。小さな体で4匹の子猫に授乳する母猫の健気さには、ウルウル。野良猫一家の動向に、一喜一憂し、その命をこの手に預かっている重責を感じる日々が、約2週間続きました。

幸い、子猫のほうは「欲しい」と言ってくださる声が予想以上に多く、捕獲前に引き取り手が見つかりました。信頼できる方に受け渡すことができ、子猫たちは、本当に幸運でした。

実は、捕獲は2回目の挑戦で成功しました。子猫が自分でエサを食べられるようになるタイミングを見計らっていたら、残念ながら2匹が姿を見せなくなり、心が折れしまいました。最初に失敗した後は、当然母猫には不信任感が芽生えてしまい、関係作りは振り出しに。ようやく3匹を捕獲できた時は、大いなる達成感と心からの安堵に包まれました。

捕獲後は直ぐに動物病院へ。母猫が手術をしている間に、子猫はノミダニ等の処置をもらい、次の生活へと旅立っていききました。

母猫も無事に手術完了。避妊が済んだことを示す耳カットをしてもらい、地域猫として、再び我が家の庭に放ちました。術後は、捕獲器を開けると、脱兎のごとく消えていききました。裏切られたと思ったんだらうなと心配し、またしばらくは子猫を探して鳴いていて、この声を聞くのが、実に切なかつた。しかし、結局はうちの庭先で暮らすことを決めたようで、今では、朝晩きっちり顔を出して、エサをねだります。うちの子になりたいのかとも思いましたが、一線を引いた距離感のまま。自由な身を開放するのが嫌なのかもしれない。なので、ゆっくりと長く付き合っていけたらと見守る覚悟でいます。

母猫と子猫が現れたとき、友人から「選ばれたね」と言われた私ですが、この時間は、実に濃密な日々でした。どうやら魔女の卵は、猫にご縁があるようです。

最後に、今回の本の紹介ですが、ドラマや映画化もされた漫画「グーグーだって猫である」(大島弓子著)はいかがでしょうか。猫との暮らしを描いたものは、星の数ほどありますが、これ、間違いなく名作の一つ。実は母猫の名前、まだ決まっていなくて、ずっと「おかあさん」と呼んでいたのですが、このグーグーもいいかなあ(オスだけど)と思っています。

文字をながめる日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

近所の八百屋でビールを飲んでしていると「活字文化についてどう思いますか」と向かいでワインを飲んでいたおじさんが言い出した。近所の八百屋ではビールもワインも飲めるし、急におじさんに絡まれることもあるのだ。「子どもたちに伝えたいことがあるんですか」などと言う。仕方ないのでそんなものはない、と即答する。ただ、ひとが思っているより楽しい仕事だとは思う。つまらなそうにビルの四階で事務作業をしている同じ業界の人たちにはもうちよいおもろそうな顔したら、とは言いたい。他にはなにも言いたいことはない。

仙台から名刺がおくられてきた。活版で刷った大袈裟なもの。かつこいい。届く前日にオグマさんから「郵便番号が間違っています」とメールが届いていた。発送しようと

して郵便番号を打ち込んだらエラーになって気づいたのだという。確かに郵便番号の八であるべきところが三になっている。言われてみれば数字の八と三はよく似ている。それぐらいならちよつとペンで書き加えればなんとかなるだろうと思っていた。箱を開いて眺めてみる。やはりかつこいい。裏面はちよつとした遊びが加えられている。活版印刷にしかできないカスレがわざと入っているのだ。オグマさんのアイデア。わざとかすれるようにするには活字を傷つけなくてはいけない。そんなことをしたら使い物にならなくなるんじゃないだろうか。でもオグマさんは平気そうだった。

改めて表面を眺めてみると電話番号もなんか違う。こちららは三であるべきところが八になっている。しかも二カ所。五と八も入れ替わっている。全く知らない人に電話がかかりそうだ。知らん顔して使うのもいいかもしれない。そもそも名刺を交換する機会があんまりない。名刺交換なんて形だけの儀式に、正確なことが書いてある名刺が必要なのだろうか。四角い手のひらに収まるサイズの紙ならなんでもいいのではないか。どうしてもというなら渡すときに電話番号だけ口頭で伝えるのも楽しいかもしれない。

広くはない工房で活字を拾うオグマさんの姿を思い出す。小さい活字を版に収める姿は苗を植える人みたいに見える。

る。誤植という言葉はよくできている。郵便番号の誤植をどうしても刷りなおしたいとオグマさんが言うので電話番号のことでも伝えることにした。「シヨックでしばらく刷りなおしたものを送れないかもしれない」と返事が来た。

小学生の息子には夏休みというものがあるらしい。学童に帽子を忘れてきたりカブトムシの世話をしたり、毎日汗をぶりぶりかいて忙しそうだ。プリントの束を持ってきて丸付けをしてほしいという。イラストを見て四角にひらがなを入れなさいとかいう問題が並んでいる。白黒のネコのイラストの下「□んだ」の四角のなかには「ば」の右半分だけが鏡に写ったような不思議な文字が書かれている。女の子が鼻から滴を垂らしているイラストの下の「はな□」には無理矢理「みず」と二文字が詰め込まれている。おもしろいからそのままでいいんじゃないかと思うが、マルかバツかと聞かれるとちよっと困る。彼に名刺を作ってもらったらどんなものができるのだろうか。それを渡されて人はどんな顔をするのだろうか。少なくとも三と八が間違っていたってどうってことないと思う。

結局、一ヶ月もたたないうちにオグマさんから刷りなおした名刺が届いた。しばらく眺めてみる。店の名前と自分

の名前、それから住所と電話番号、メールアドレス。単なる活字の集まりが詰め込まれた小さなカード。実は名刺を作るのは初めてではない。以前勤めていたところでは常に持ち歩いてた。忘れたらわざわざ取りに帰ったりしていた。いまの店を始める少し前にも近所の印刷所に行って作ってもらった。必要だと思っていたのだ。心細かったのかもしれない。そのとき刷った名刺はもうない。全部人に渡してしまった。誰に渡したのかも覚えていない。最近「名刺となくて」と平気というようになった。そもそも名刺をくれと言われることが年に一回くらいしかない。

届いた百枚の名刺はそのまま箱にしまった。使うあては全然ない。なにか意味があるのだとしたら、もう少しこの仕事をしなさいということなのかもしれない。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

いま、創られつつある本屋、あるいは

「ローマを見てから、死ぬ。」

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

X (旧・TWITTER) を開くと、矢部直が亡くなったと、松浦俊夫がポストしていた。私のタイムラインでは、たくさんの人が哀悼の意を表し、思い出を語っていた。

矢部直・松浦俊夫・ラファエル・セバグの三人によるジャズDJチーム、U. F. O. がセカンドシングルとして九二年にリリースした「Loud Minority」の衝撃は、今でもはつきりと覚えている。音楽としてのカッコよさとともに、「少数派であっても黙らない」というメッセージをしっかりと受け取った。

元々UKロックを聴いていたこと、「ジャズで踊る」ムーブメントがイギリスを中心としていたことから、音楽に絡んだ英国の歴史に興味を持ち、この頃から「社会と文化の「関係」について、なんとなく考えるようになる。

また、大学でフランス語を教わった先生が翻訳した本が、ギ・ドゥボールの『スペクタクルの社会』（木下誠訳・平凡社・現在はちくま学芸文庫）だった。六十八年、フランスの五月革命を準備し、ゴダールやマルコム・マクラレンに影響を与えた、シチュアシオニズムという思想／実践の基本書だ。

そして、シチュアシオニズムとも関係の深い、カルチュラル・スタディーズ（以下CS）との出会いは、必然と言ってもいいだろう。パーミンガム大学やブリストル大学を中心に、マルクス主義・フェミニズム・ポストモダニズムなどの理論を取り入れながら、日常生活の文化的実践を研究对象としたのが、CS。日本の研究者が書いたもの・翻訳書と、手当たり次第に読みながら、様々な年代の音楽を聴き漁った。

ブームともいえるほど盛り上がったCSは、徐々に「チャライ」という批判が強まり（実際に中身の薄い本も多かった）、大きな新刊署単の棚にも、今はほとんど置かれていない。CSに関する本が当店に多いのは、そういった理由だ（あまり売れてないけど）。

八十九年以降、私の中では本を読むことと音楽を聴くことは同心円状にあり、もしかしたらお店の棚にもそれが

にじみ出ているかもしれない。

そんな訳で、カウンター越しにお客様と音楽の話をする
ことが増えた。ボルゾイレコードの前垣さんに教えてもらっ
た、という方も多い。実家から引っ張り出してきた7イン
チを買ってくれた、DJの方々。アミ（BTSのファン）
で、シリカゲルが最近のお気に入りという女性。SNSで
パラノウルおすすめしてましたよね！と盛り上がった、バー
の店長さん。（どちらも韓国のインディーズバンド）。売
り切れた翌日に来店、『読書と暴動』つてあります？とた
ずねられた、大阪から来た女性。青谷で行われる音楽祭の
ポスターを届けてくれた、古着屋の店長。ミャンマー音楽
を紹介するイベントのチラシを持ってきた青年。ほとんど
が、店を始めてから知り合った人たちだ。
地域のハブになりつつあるなら、うれしい。本がもっと
売れると、なおうれしい。

【参考文献】

『UKジャズ・ダンス・ヒストリー』マーク・スノウボー
イ・コットグローヴ K&Bパブリッシャーズ

UK屈指のパーカッションスト兼ジャーナリストによる
ドキュメンタリー。

『ハマータウンの野郎ども』ポール・ウィリス ちくま
学芸文庫

オアシスが最後の労働者階級ロックバンドらしい。ロッ
クにしろヒップホップにしろ、現場たき上げ系・中産階
級・実家太い系が交わるからこそ、新しい動きが生まれる。
それはともかく、CSの古典その①

『サブカルチャー スタイルの意味するもの』D. ヘブ
ディジ 未来社

パンクとレゲエ。CSの古典その②

『引き裂かれた声』平井玄 毎日新聞社

『ワールドミュージック』と名付ける暴力性（IIオリエ
ンタリズム）についても、ずっと考えている。

『GSアイ・ラヴ・ユー』音楽出版社

グループサウンズの音源発掘についてはかなり進んでいる
が、八十年代の再評価と社会とのつながりは、もっと研究
されてほしい。

定有堂ビル2階

古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS

店主 高木善祥



SHEEPSHEEP BOOKS

本を作る側から (17)

村瀬 謙介

(小取舎)

今年に入ってから、鳥取県立図書館のホームページでちよくちよく電子書籍を読む。

家が近いので実際に図書館へ行った方が本との出会いが多いし、仕事が終わってから来館し閉館までの短時間で急いで選ぶのも楽しいので、電子書籍に対してそこまで興味はなかったのだが、この電子書籍サービスを使ってみて、実際の図書館で借りるまでいかに本を好きな時間にくくり読める点が良い。大判の本を何冊も手に抱え、借りて帰るのも結構大変だったこともあるが、これなら楽チンである。「電子書籍の立ち読み」のような感じで使っている。しかし、どうやら鳥取県立図書館の電子書籍サービスは始まってから半年経った六月時点のアクセス件数が一日平均五〇件前後にとどまっているよう。自己啓発やビジネス、専門書や語学のハウツー本などが読みたいなら豊富にあるのでどんどん使った方が良い。地域資料を探す際にも便利が良い。小取舎の在庫を買ったり譲っていただいた積読の

本で部屋の床が抜けそうな私にはぴったりでございます。あと、電子書籍の利点は字の大きさがスワイプで変えられるという点か。

紙の本にこだわり、小規模出版社を立ち上げた私だが、電子書籍を全く無視はできないのである。情報技術分野に関するコンテンツ事業を行う株式会社インプレスが、二〇二三年度の電子書籍市場規模が前年比七〇%増の六四四九億円に拡大したとする調査結果を発表、二〇二八年度には八〇〇〇億円の市場になると予測している。何年何十年先にも残しておきたい情報はやはり長い歴史を持つ紙の本が良いので小取舎の本は紙ベースにこだわりたいのだが、時代にも並走していかないといけないだろう。近い将来、スマートグラスやコンタクトレンズを通して本が読むことが一般的になるかもしれない。

七月一七日にドイツ図書館協会は地方における図書館振興を勧告する文書を発表した。ドイツ図書館協会では、緊急支援プログラムにより、二〇二〇年から二〇二三年まで六〇〇万ユーロ(日本円で約一〇億円)をかけて、ドイツ全土の最大二万人の住民が住むコミュニティにおける現代図書館のコンセプトを支援したという内容で、連邦政府文化メディア委員会(BKM)によって開始されたこのプロ

グラムの目的は、地方における「サードプレイス」としての図書館を強化し、平等な生活条件の創出に貢献することであった。素晴らしいのは文化に対する危機感を持って緊急であるということを銘打ち行動したことである。

逆に正直、まだそんなことを言っているのかい。まだそこなのかい。といったニュースが目に入る（以下要約）。

斎藤健経済産業相が先頃、代官山蔦屋書店（東京都渋谷区）と王様書房（同目黒区）の視察や書店経営者との意見交換を行い、「今夏をめどに（書店振興に向けた）課題を整理する」考えを明かした。ネット通販の普及などによって全国で書店の閉店が相次ぐ中、書店の経営課題などを取りまとめ、政府としての支援策を検討する。斎藤氏は「書店が減れば、国力が弱まる。一歩でも二歩でも前に進めたい」と述べた。

カフェの併設やイベント開催による集客や、デジタル技術を使った業務改善など、書店が成果を上げている事例を収集。全国の書店に周知し、経営に役立ててもらおう考えた。また、経営課題も共有し、補助金など今後の支援策を検討する。

昨今の「書店の経営課題」って、書店が悪いみたい17-
に聞こえるが、目をむけるのは紙の本を購入する人口の増加なのでは。読者人口を増やすというのも少し違う。政府が考える問題とその解決策は何なのだろう。書店を増やすこと？これ以上書店を減らさないこと？ ならば都内の書店だけでなく地方の書店も視察すべきであるし、あなたが毎月地方書店からまとめて本を買ってくれただけで生きながらえますよと言いたい（そんなことはできないだろうが）。そもそも書店によって想いが違うのでひとくりにされても……と思う。私が恐れているのは電子書籍でも紙の本でも「本」を読まない人が増えることだ。



小取舎の最新刊

『宇沢弘文「社会を治す」

社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売

汽水のほとりから (41)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

教員には様々な分掌といわれる業務がある。教務、進路生徒指導、生徒会、図書など。だが、専門教科と違って、分掌は毎年同じとは限らない。自分の場合、現在の分掌は人権教育で、その主任を担当して今年度で三年目になる。人権教育の主任はかつて同和教育主任と呼ばれていたが、いつの頃からか名称が変わった。原因は恐らく「同和」という言葉が部落差別の問題に限った印象を与えるからだろう。確かに、学校における人権教育の原点は同和教育であり、いわゆる同和地区生の学力進路保障、奨学金制度によるサポートなどは当時の同和教育主任の重要な仕事だった。しかし、現在は昔では想像できないほど人権問題は広がりを見せ、よりグローバルな視点に立った人権意識の向上が求められる時代になっている。それに見合う言葉として「人権」を名称に使用するようになったのだろうか。

ところで、人権教育主任を担当して人権について学ぶ中で、特にこれとは思われたのが「マジョリティ特権」という言葉である。欧米由来の概念だが、とても重要な概念に思われてならない。何故ならば、あらゆる差別の問題は、差別される側⇨マイノリティ(社会的劣位者)ではなく、差別する側⇨マジョリティ(社会的優位者)に原因があるからだ。両者の区別は、伝統的な社会的価値観に起因し、その社会の構成員にそれは構造的に押し付けられている。しかも、そこには無意識のバイアス(偏見や思い込みなど)が強く働いているため、差別する側⇨マジョリティは自ら特権的優位にあることを意識しないことが多い。よって、マジョリティは誰もが自覚を欠いたまま、差別的な言動をしてしまう可能性は十二分にあると言ってよいのである。「マジョリティ特権」の具体例を挙げてみよう。例えば、大学進学者の家庭はおおむね裕福だと言われる。あるいは大学進学者の保護者の学歴は大卒以上であることが多い。そうした家庭に育った人が大学進学は当然という感覚を持つとすれば、それは「マジョリティ特権」に該当しよう。また、日本のように男性優位の社会で育ってきた男性は、それだけで「マジョリティ特権」を行使していると言える。今はもう無いだろうが、会社内でお茶を出す仕事を女性に限定したことなど、多くの男性は疑問視して来なかった。

なお、或る人が絶対的にマジヨリテイ／マイノリティに固定されているわけではない。両者を分ける切り口は一つでないからだ。ある場面では差別する側＝マジヨリテイである人が別の場面では差別される側＝マイノリティだということとは当然ある。「マジヨリテイ特権」という概念が重要なのは、誰もがマジヨリテイかマイノリティのいずれかに分けられる非対称な構造の存在を示すことによつて、誰もが差別の当事者にならざるを得ないという点にある。

社会学者の岸政彦によれば、社会とは交換できないものたちの集合である。普通、社会は人々がつながつた状態だとされるが、同化し得ない人の間には境界線や壁のようなものが存在する。ましてやマジヨリテイとマイノリティのように非対称的で不平等で一方的な関係であれば、それは厳然と存在する。その上で、岸はこう述べている。「もし境界線が易々と乗り越えられていく物語を、当の境界線を「構造的に押し付けている側」であるマジヨリテイのひとが語ってしまった場合、自らが押し付けている壁を否定し、隠蔽し、その責任から逃避することになる。だから私は、私たちは、あくまでも境界線の傍に踏みとどまるべきなのである。「本土も沖繩も関係ない」という言い方は、あきららかに、沖繩の側からなされた場合と、本土の側からなされた場合とでは、政治的な効果という点において真逆

の結果をもたらすだろう」（『はじめの沖繩』新曜社）。19

右に引用した著作で、岸は沖繩の人々をマイノリティと位置づけた上で、まさに本土の人間の「マジヨリテイ特権」の自覚のあり方について語っていると見えよう。私たちはついマジヨリテイであることを忘れ、マイノリティの立場をなおざりにしがちである。が、それが如何に恥ずかしいことか。同書には、岸が学生を連れて辺野古を訪れた際、ガイドをしてくれた関東出身の五十代くらいの元教員の男性が「わずかなお金で美ら海を売り飛ばした沖繩の人は反省しなければならぬ」と言うのを聞くに堪えず、途中で止めさせた、という逸話が登場する。彼の発言には沖繩北部の貧しさや周辺性に対する理解が欠けていると感じられたからだ。岸は、これについてこう述べている。「彼が言ったことは正しかった。しかし、私たちが「正しくある」ことで踏みこじってしまうものが存在する」と。

SNSの登場は、相手を選ばない言葉で氾濫させた。が、「マジヨリテイ特権」の自覚は、マイノリティに届く言葉を自覚的に選ぶことでもある。それは岸の言葉で言えば、「境界線の傍に踏みとどまるべき」倫理の実践である。

ウッドストックと昭和男

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「ボクたち、ウッドストックがやりたいんです」。四半世紀も前のことだ。私よりひと回り以上も年が若い、二代の知り合いが真顔で相談にやって来た。

「えっ、ウッドストック?」 何のことか分からず、聞き返した。「あの伝説のウッドストックです。どこか、やれそうな会場ありませんか」。彼らは熱にうかされたように同じ言葉を繰り返した。

◇ ◇ ◇
どうやら、ウッドストックのドキュメンタリー映画(1970年公開の『ウッドストック/愛と平和と音楽の三日間』)を観て、こうなったらいい。1969年の夏、アメリカの郊外の農場に40万人の若者たちが集まった伝説的なフォーク・ロックの野外フェスティバル。

3日間のステージにはジャニス・ショプリン、ザ・フー、

C・S・N・Y、ジミ・ヘンら30組以上が出演、60年代のカウンターカルチャーを象徴する野外ライブだった。らしい。と言うのも、同時代体験と言えるほどの記憶が私にはないからだ。当時、小学六年生。関心はもっぱら「アポロの月面着陸」と「ハレンチ学園」、翌年開かれる「大阪万博」にあった。

◇ ◇ ◇
「野宿しながらラブ&ピース、ベトナム反戦を訴え、ロック音楽に長髪のヒッピー、ドラッグ：若者が自由な時代だったんですね」。彼らは生まれてもいない60年代に明らかにかがれている表情だった。

私がああの映画を観たのは70年代の終わり、大学生だった。当時のアメリカは、ベトナム戦争は終結したものの、日本の経済進出もあつて不況と停滞のどん底。ヒッピーはヤッピーに駆逐され、反体制の若者のムーヴメントは、レーガンに代表されるネオコン(新保守主義)の波にあっけなくのみ込まれていった。

そんな結末を目の当たりにした私には、ウッドストックは全共闘と同じく今で言う「オワコン」で、あまり興味はなかった。まあ彼らに水を差すのもなんなので、「ふんふん、懐かしいね」などと適当に相づちを打っていた。

ところが、伝説であるほど若者はあこがれるもの。彼

らは会場探しに奔走し、海を臨む高台の広場を見つけた。

会場は、ふだんは高齢者が憩うグラウンドゴルフ場だった。「亀の甲ら」を模したユーモラスなステージはだれもがクスリと笑ってしまい、本家ウッドストックの反体制のイメージとはかけ離れていたが、まあ仕方がない。

聴衆もそこそこ集まり、なんとか始まった鳥取版ウッドストックの楽屋に、その男は前触れもなくひよっこりやって来た。日本の60年代を象徴する男が。

◇ ◇ ◇

「やあやあ、君たちの演奏、良かったよ。でも、チェット・アトキンスはね、もうちよつとこう弾くんだよ」

白髪を上品になでつけた小柄な老紳士は、やたらギター奏法に詳しくかった。誰もがこの顔はどこかで見たような覚えがあつたが、思い出せず、きよんととしていた。

一人が「あつ、植木等だー」素つ頓狂な声を上げた。この時、「お呼びでない、お呼びでないね……こりやまた失礼しました」と、当の本人がああのかめのギャグで応えたかどうかは不明である。

ただ、スーダラ節で有名な昭和の大スターが突然登場した楽屋は、ウッドストックのはずが、たちまち「シャボン玉ホリデー」のような雰囲気変わった。

◇ ◇ ◇

植木等は、たまたまチラシを見て、若者のイベントを励まそうとやって来たらしい。

クレイジーキャッツのギタリストで、映画「無責任男」シリーズなど、昭和を代表するコメディアンだった植木は、晩年長く肺気腫に苦しんだ。三朝町にある岡山大学病院の医療センターで温泉療法を受け、仕事があると東京に戻る生活。

滞在はお忍びで、病院や町の関係者には厳しいかん口令が敷かれていたが、それをある時、植木自身が破つてしまふ「事件」が起きた。

町に来て仲良くなつた地元町長を応援しようと、町長選の出陣式の演説を買って出たのである。せっかくのかん口令も水の泡。「日本一の無責任男」、その素顔はどこに真面目だった植木らしいエピソードが鳥取のあちこちに残されている。彼は2007年に八十歳で亡くなった。

ウッドストックより、こんな話が私は好きだ。

因幡に還る（後）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

平成六（一九九四）年、因幡万葉歴史館の柿落しの記念コンサートの際、楽譜にサインをお願いした。

作曲家は名前に続けて「In Inaba」と書き添えた。氏にとつては、国府でも鳥取でもなく、「因幡」なのであった。

伊福部は、戦時中、来るべき徴兵検査に備え（旅程を確かめるため）、鳥取を訪れている。そして、先祖の故地に立った時、自分の帰るべき場所は「ここだ」と思い定めたという。

この時代の列車旅はどの位の時間を要したのだろうか。

昭和十七年、東京の次兄が急逝した際、札幌から駆けつけているが、その時は二日半掛かっている。東京側が、遺族のために葬儀を一日遅らせて待っていてくれたが、それでも滑り込みであったという。既に、決戦体制下にあった

ので、列車本数が相当間引かれていたようだ。

では、伊福部が来鳥した際はどうかであったか。その時の旅程をシミュレートしてみた。

徴兵検査の前だから、昭和九年か、前年頃だろう。学生であれば、時間が自由になる時期は夏季と考えるのが妥当かと思う。

生憎、昭和九年のものが見つからなかったので、直近の昭和十年十月の『汽車汽船旅行案内』を参照することにする。

札幌から鳥取まで、太平洋側ルートと日本海側ルート、単純に乗車時間のみを比較すると、両者とも最短ほぼ三七時間である。一日半といったところだ。しかし、実際の旅には、列車接続のための待ち合わせがある。

現実に即して、旅程を組んでみると、太平洋側（東北本線・東海道本線経由）の場合、札幌を午前九時五十分に出発して、鳥取着が翌々日の午後二時二十二分。所要時間は五十三時間に及ぶ。

一方、日本海側（北陸本線経由）の場合、青森から大阪行きの急行があり、乗り換え時間を大幅に節約できる。同じ時刻の札幌発で、鳥取着が翌々日の午前三時三二分。約四十時間である。

どちらを選択したにせよ、一日半から丸二日は掛かる旅程であった訳で、大旅行と言つて良からう。伊福部にとつて、初めての長距離旅行だったのではないだろうか。

鵬程千里、辿り着いた宇倍野村（現・鳥取市）は、人家も少ない田園地帯。因幡三山に囲まれ、稲の葉が、青々と風にそよいでいたことだろう。「稲葉」（稲羽）の名に背かない光景は、「まほろば」と映つたのではなかったか。そして、遠祖・徳足比売の墓所跡、伊福部家累代の奥津城、父祖が代々神職を務めた宇倍神社に詣で、遙かな旅路の果てに去来したものは、連綿と続く一族の血脈と、その末端に連なる者、という確信であつたに違いない。「帰るべき場所」とは、そういうことであろう。

冒頭のコンサートでは、国府町が委嘱した「因幡万葉の歌五首」が初演された。万葉集から、因幡に所縁の深い家持と、坂上郎女の五首を選び、歌曲集としたものだ。

藍川由美のソプラノに、伴奏が野坂恵子の二十絃箏、星川龍二のアルト・フルート。

曲調に、伴奏楽器に腐心し、譜面を書き進める都度、歌手を呼んで意見を聞いた。この年の作品は、この一曲のみ。映画音楽の仕事は断った。結局、足掛け二年を要したとい

い、作曲家にとって、それ程、重要な作品であつた。

「伊福部」は「息吹」に通じ、風を自在に操る職能集団の名称であつた、という説がある。系図を繕げば、先祖の中に「風媛」「都牟自臣」など、風を彷彿させる名が出てくる。風を呼び、作物を実らせ、息を送り、金属を精錬する。声は聖霊の風、この記念の作品が声楽曲であつたのは偶然ではあるまい。作曲家・伊福部昭が、祖霊と祖神に捧げた魂の歌と申すべきであろう。

伊福部昭記念館

開館日：月初の第一金曜日から四日間

休館：十二月～二月（冬季積雪のため）

開館時間：10：00～16：00（入館15：30まで）

入館料：一般1000円、十八歳以下500円、

五歳まで無料（企画展は別料金）

住所：〒680-1425 鳥取市河内361

mail：akira@ifukube.net

鳥取あれこれ その九十六

内田克彦（地域研究家）

明治七年生で、今年生誕一五〇年を迎えた永井幸次の生誕地について、自伝『来し方八十年』に、次の記述がある。

若桜街道筋（現県庁前の広い道路のこと）の角から西約五十間の所に大きな樅の木がある。その下に倉があったが、その倉の側にいわゆる「尚徳館の教師の」官舎があった。〔略〕その官舎で彼（永井のこと）は孤々〔ママ〕の声を上げた（明治七年二月二十一日）。

現在の「新感通り」沿いではないかと考えるが、鎌谷静男『琥珀のフーガ 永井幸次論考』では、次の記述がある。

生地は現県庁前から若桜街道を西へ約百メートル、西町バス停付近にあった藩校尚徳館の官舎だったという。

その後、そこから移る。

彼の三才の時、西町の今図書館がある所の北側、鹿

野街道筋の元池田藩〔ママ〕家老の一人である駿河守の邸宅を購入して移転した。

この場所は、『鳥取城下全図』により特定できる。鎌谷著では、従妹の野口（結婚後、関谷）さんの手記を引く。

永井家の屋敷は〔略〕お寺の様な大きな門の千坪程の武家屋敷の構えで、塀の高さも半丁程あった。門を入ると右側に門番の家があり、その後ろには何百年経ているかと思われるような松の樹と杉の樹が空高く立っていた。

明治一一年生の、岡野貞一の生誕地については、鈴木恵一編著『岡野貞一とその名曲』の中の「岡野貞一生誕地考」に、次の記述がある。

これ迄岡野貞一についての記述には、西町、吉方、古市などいろいろ書かれている。〔略〕私は次の8項目の事柄によって、現在の鳥取市古市247番地とした。

しかしながら、東京音楽学校教務部保存の履歴書に「邑美郡古市村に於て生る」と明記されていること、の項目以外の七項目は、いずれも伝聞推測に過ぎない。

ネット上の吹浦忠正のブログには次の記述がある。

岡野の研究者でもある鳥取市役所の井上清司商工部長が疑問を呈する。「〔略〕吉方の間違いではないか。市内には両方の地名があるが、岡野が通ったのは吉方学校であり、吉方という字を続けて書くと古市のように読める。それを誰かが読み違えたままきれいな楷書に書き写したのではないか」。〔略〕長男の匡雄(まさお)氏にも確認した。〔略〕「両説あるんですが、結局は判らんのですよ。不明という(こと)にしてください」。

『角川日本地名大辞典』によれば、岡野が生まれた時点で「邑美郡古市村」「邑美郡吉方村」はいずれも存在した。

古市〈鳥取市〉〔古代〕古市郷〔略〕〔近世〕古市村
江戸期〜明治22年の村名。〔略〕22年〔当時は、邑美郡、明治29年に岩美郡〕美保村の大字となる。〔近代〕古市 明治22年〜現在の大字名。はじめ美保村、昭和8年からは鳥取市の大字。〔略〕

吉方〈鳥取市〉〔中世〕吉方郷〔略〕〔近世〕吉方村
江戸期〜明治22年の村名。邑美郡のうち。〔略〕明治12年下吉方の地域が分立して吉方町になる。同22年

鳥取市の大字となる。〔近代〕吉方村 明治22年〜昭和12年の鳥取市の大字名。〔略〕〔近代〕吉方 昭和12年〜現在の鳥取市の字名。

吉方町 〔近代〕明治12年〜現在の町名。〔略〕

但し、「古市村」とあるのは東京音楽学校の履歴書のみである。鈴木著では、明治一六年五月の祖父の死去の後、「街内の小学校に入学させ、勉強の出来る環境にと、吉方町129番屋敷の長屋に転居」とあるが、「古市村」から「吉方町129番屋敷」に住所を移した、とする根拠資料は明示されていない。鈴木著では、「戸籍としては、西町157番屋敷と明記されている。そしてこの戸籍には、吉方町129番屋敷より移ったとなっている」とある。わらべ館に尋ねると、「戸主となった時点での岡野貞一の戸籍は吉方町129番屋敷であった、ということです。」とのことである。

因みに、『現代音楽大観』（東京日日通信社編昭和二年）には「鳥取市外古市村に生れた」とあった。恐らく東京音楽学校の履歴書に基づいた記述であろう。

岡野家の子孫の方に「除籍簿」を取り寄せて頂いて、生地を確定したいものである。

内坪井町日記

(3)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

七月末日

子どもに向かつて「夜は静かにしなさい」とか「食事中はうろろしなさい」とか「けんかはしなさい」とか「歯磨きしなさい」とか言いながら、なんて自分はつまらない人間になってしまったのだ。と思いかけた。もしくはもともとつまらない人間だったのだと、気づいてはいたが見ぬふりをしていたこと気づいて少しだけしよげたりしていた。が、実際のところどうなのだろうか。

習慣を身につけても、もうことはなかなか大切なことだと今では思っているが、繰り返される日常に逆張りするようなカルチャーがこの30年とか40年とかにあったのではなからうか？今はむしろ日々コツコツと、なんなら敬虔に何かを繰り返す方がカッコよろしいのではないか。いや別に今はではなくずっとそうだったのでは。何をしてきた

のか自分は。

ただ、子の行動を制限するのと、習慣を教えることが微妙に違っていると思うのだが、なかなか上手くはできない。

七月某日

早稲田にあるリネンというライブハウスにてライブ。新曲を演奏したり、久しぶりの曲を演奏したりで楽しんだ。

七月某日

最近知り合った、福島菓子店を経営する大先輩と言えの方が、我々を励ますために八代に来てくださった。会社に来て、うちの初対面の社員にも菓子屋とはどうあるべきかを滔々と熱く説き、話は長いが的をえており頷くばかり。ひとり捕まえては四十分話す、というのを三回くらいやってた。

一緒に近所の競合店を見学したり、食事をしたりしたのち、歴史の好きな方なので、八代城址や松浜軒を案内する。歴史に疎い私と違いとても興味深い様子で石垣などを観察しておられ、そんな視点がなんだか羨ましかった。

城址の隣にある市役所に突入するぞと連れて行かれ、農政課に伺い、何かいい補助金はないのかなどと初対面の役所の人々と話をする。その様を見て圧倒される私。

自分には仕事に対する勢いというものが欠如しているのを改めて認識する。人を巻き込んで何かをするのがとても苦手だ。毎月来てくれないかな先輩。

七月某日

エヌエイチケイFMにて「洋楽シーカーズ」という番組があるのを知り、聴いてみた。

伊藤政則氏と大貫憲章氏の二人がDJなのだけど、掛け合いが程よくとても楽しい。二人の趣味は違うのだろうけど、互いの敬意と、知らない音楽に関しては何となく緩やかさがいい具合。かかる曲は自分の好みのものは少ないけれど、清々しい。

そしてゴンチチのラジオは夏の恒例、音楽の自由時間。選曲が本当に素晴らしい。日差しの強烈な通勤時間にエアコンを効かせて聴くのがとても贅沢な気分になる。

七月某日

仕事に拘束されすぎた反動で、後先考えずにライブのスケジュールを入れてしまった。

八月十六日 東高円寺UFOクラブ

八月二十四日 神戸ヘラバラウンジ

八月二十五日 大阪ムジカジャポニカ

八月三十一日 名古屋ブラジルコーヒー

九月一日 京都アーバンギルド

十月五日 岡山ペパーランド

十月十九日 名古屋KDハポン

十月二十日 大阪FUZZ

十月二十六日 日つくば某所

十月二十七日 日下北沢リブハウス

十一月二十四日 早稲田リネン

十二月七日 神戸ヘラバラウンジ

年内あと十二本。絶対どこかで支障をきたす。そして赤字。がんばるぞ。

文化のある場所？

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

七月、友人が私の職場を見学したいと鳥取に來た。日帰りなのか思っていたら、泊まりだという。ただ、その夜は、定有堂のビオトープが開催される日だった。

ビオトープは、定有堂の読書会で、主に小説を扱っている。毎回、報告者がレジュメを作ることになっており、今回は私がヘルマン・ヘッセの『車輪の下で』を紹介することになっていて、抜けることができない日だった。すると、たまたま彼女がその本を読んだことがあるから、参加してみたいと言ってくれた。学生時代にその本に出会った彼女と、読書会の中で読むことになってしまった私とは、読みの深さが違う。

百年以上経っても、『車輪の下で』のリーダーダビリティの高さには圧倒される。作品自体は、ヘッセの神学校時代が反映された自伝的作品で学校教育を批判している。それぞれの学生時代の思い出、昔読んだ時との変化、自然描写の中にあるメタファー、作者であるヘッセの人生。

そうやって話している間に、二時間があつという間に過

ぎてしまった。そして、その後の延長戦にも繋がり、火曜日の夜なのに、友人と一緒に参加してしまった。

「こうやって、仕事以外で集まれる場所いいですね」と言いながら、彼女は翌日、都会へと帰っていった。

七月十四日、湯梨浜にあるJig Theaterでは、三周年記念で、ヴィクトール・エリセ監督の作品が公開され、濱口竜介監督による講座『見つめるということ』が行われた。「対話的で深い学び」と教員の世界で言われるようになってから、最近では自分自身もレクチャーを受けることは少ない。今回は、いわゆる座学のスタイルで、映画『ミツバチのさきやき』が解説された。監督の語りの中で、深みに気づく。それを私たち聴衆が見つめて、聞き入っていく。作品は、冒頭『フランケンシュタイン』という映画がある村にやってきて、上映される場面から始まる。ドキュメンタリー的に撮られた少女・アナの表情。子どもであることをうまく利用したエリセ。おそらく、映画を撮る人だからこそ、驚きを禁じ得ない部分があるのだろう。ただの映画鑑賞者の視点から、映画撮影の裏側へと旅をするような二時間だった。

旧小学校の教室に、夜、四十人ほどが集まって、映画の話に耳を傾ける。それを馬鹿にせず、話に巻き込まれて

いく奇跡。『ミツバチのさきやき』の冒頭のように、映画が町にやってきた。あの場面に、私もいたのだろうか。

コロナ禍の頃と変化して、容易に都会に出られるようになった。レクチャーの前日、私は大阪の梅田にいた。梅田芸術劇場で、ミュージカル『ロミオ&ジュリエット』を観るためだ。

シエイクスピアのあの名作を題材にした現代風のフランス製作のミュージカルである。音楽はロック調のものが使われ、ヒップホップのようなダンスが踊られている。

十代の二人は一気に愛の破滅へと走っていく。ただ、生き残って仕舞えば、悲劇としては成立せず、ロミオもジュリエットもただの名前になっていた。シエイクスピアが作品にしてから、四百年近く、運命の恋人として知られるようになった二人には常に死の影がある。この舞台では、死はダンサーによって肉体を持って演じられている。

千秋楽を翌々日に控え、観客によるスタンディングオベーションで幕を閉じた。

そうやって舞台を見ながら、初めてこのミュージカルを観たのは、日本初演の宝塚版で、梅田芸術劇場だったことを思い出す。調べてみると、十四年も前のことだった。今では、ジュリエットはだいぶん下の存在になった。

終わった後、本屋でも巡ろうと、Toi books へと向かう。大阪にある個人経営の本屋で、ビルの二階の小さな一室にある。小さな部屋には本が敷き詰められ、積読の山のようで、濃縮された新しい発見が多くある。そこで九月の読書会に向けて『多和田葉子ノート』を買う。幾人もの客が本を買ったり買わなかったり、足早に去る中、ゆっくり物色していた私には、帰りのバスの時間が迫っていた。バスターミナルに向かう私の横を街宣車が走っていく。

七月、そうやって「文化のある場所」を巡り続けた。

都会にいれば、「文化のある場所」は近い。お金を払えば、容易に行ける。それぞれの人がそれぞれの趣味嗜好に合わせて、場所を選ぶ。一方で、田舎では文化がやってくることを待ったり、連れてきたりしなければならぬ。趣味嗜好を言っている場合ではなく、やってくるなら、出向かなくては次がいつになるかわからない。だからこそ、自分が触れようとしなかったものに出会うこともある。それを通して、見知らぬ人とさきえ巡り合う。

「文化のある場所」を語る時、田舎と都会では風景が異なる。どちらがより他者を受け入れることができる場所なのか、どちらが目の前のものをきちんと見つめられているのか、わからなくなってくる。

やっぱりめがねが好きだ

あきの素生

(くうねるめがね)



今年上半期、最も多く口ずさんだ歌は、「めだかの学校」(一番)だと思う。めだかたちは、いつもけんかしているように見える。スイミーたちみたいに、群れで仲良く泳ぐもののかなと思っていたが、外敵から身を守る必要がない環境では群泳することはないらしい。気性が荒いのか、他のめだかを追い回す者が何匹かいて、なわばり争いに勤しんでいる。少しばかり、しつくり来ないな、と感じつつ、牧歌的な童謡を口ずさみながらえさをやる。めだかへの傾倒ぶりは前回書いた通りだ。

「めだかの学校」を歌っているとき、必ずめがねがオーバーストップする。そしてそれを歌い出そうとして、おこれは「とんぼのめがね」ではないか、と思いとどまるのである。でも、めだかとめがねはぜったい結びついているんだよな、としつこく思いめぐらし、それが多田ヒロシの絵本『めだかのめがね』からくるものだと思いがいった。

やっぱりめがねが好きだ。めがねをかけてない自分の顔は、なんだか心許ない。のっぺらぼうとは行かないまでも、つるつると視線がすべって、つかまるところがないというか。さくらんぼののつてないクリームソーダとか、いっそセラメルソースのかかかってないプリンとか、画竜点睛を欠く、みたいな感じだ。

そんなになるまでめがねをかけ続けていたら、知らないうちに、めがねにまつわるライフハックが身についていた。当たり前と言えば当たり前なのだが、最近ふとそのことに思い至った。

例えば髪を結ぶとき、ゆるゆるふんわり、は手に合わず、横つちよをタイトにまとめるのが好みなのだが、めがねを着脱するたびに、耳の上の髪の毛がひっかかって飛び出す。それを都度めがねのつるの下に押し込んで直すのが面倒だし、気付かなければ飛び出しっぱなしだし、どうしたって結びたてのようにきれいには戻らないので、めがねのことがほんのちよびり嫌になる。それが、耳より一、二センチ上から髪をすくって結ぶだけで解消できるのだとこの歳になって気が付いた(ハーフアップに限る)。こんなしょうもないことで名前を出すと叱られそうだが、私にとっ

てはコペルニクスの転回であった。

めがね生活を始めた人から、朝、どうやって身支度しているんですか、と問われた。言われるまで意識していなかったが、確かに顔をぺたぺたぱたぱたしている間、あまりよく見えていない。必要があれば、超至近距離で鏡をのぞき込んでいたので、はたから見るときざかし珍妙だろう。めがねからはみ出るところは、めがねをかけた上で、顔の角度を調整しながら手を動かしている。そうこうしているうちに、めがねのレンズが汚れる。めがねかけの矜持として、レンズの汚れは放置しないよう心がけている。最近、レンズの汚れはまず水道水で流してからティッシュでふき取るようにとめがね屋さんで指導を受ける。レンズを傷つけないための拭き方だ。これは私の勝手なこだわりだが、水が丁番や鼻あてなどのねじに滲みて、錆びでもしたら嫌なので、レンズを拭いたあとのティッシュで、ねじの部分をぐぐぐと押さえて水気を取るようになっている。

このほか、「めがねのつるは左から畳む」「めがねを探すめがねを定位置に置いておく」「以前かけていためがねは、お風呂用のめがねとする」「防災バッグにも、以前かけていためがねを入れておく」「マスクを着けてめがねが

曇るなら鼻を出す（屋外）」「家、車、職場、各バッグ、どの場所にもめがねふきを常備しておく」「比較的眼睛が小さくならないめがね選び」「結局濃い色のフレームが好み」など、めがねにまつわるお作法（我流多分に含む）を挙げるときりがない。それだけの時間をめがねと生きてきたんだなあとしみじみした。

ずいぶん昔のことだが、「私たちの頃は、めがねの女性は就職できないと言われていた」と聞いた。めがねをかけることを選べる自由があるのは幸せなことだ。この悲しい引き継ぎをしないでいられたらいいと思う。



ご案内



ドラメリア (座敷わらし)

読書会 『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

定有堂教室 「読書室」ピオトープ」

8月8日 木曜日 第14回 19時から

テキスト 奈良敏行＋三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』作品社
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

8月27日 火曜日 19時から

テキスト 関口正司『J.S.ミル―自由を探究した思想家』

中公新書 2023年会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

8月20日 火曜日 19時から

テキスト 浅田彰『構造と力』 中公文庫

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

太極拳教室(葉香クラブ) 会場 二力所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)

二段 公認B級指導員(みちる教練)

・編集後記:

小部屋暮らしをいかに快適に送るか、というか熱中症にならずに過ごすかが最近の関心事。冷やして使うネックリングがなかなか快適で、自転車通勤にも活躍中です。時々外し忘れる猫を先日見送りました。近所の商業施設前で出会ってから十八年、長く傍にいてくれました。重要な会議が目前に迫っていて仕事を休めなかつたけど、マスクを付けていたら思ったより表情はバレないものです。ちいたん、ありがとう。

ドラメリア(編集長)

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』の書評が『みんなの図書館』(AUG2024)に掲載。(ながい・たからさん) 図書館独自の工夫をしようということ、社会教育職員・図書館員の視点で読んでも学ぶものは大きい、と紹介。また、南陀楼綾繁さんが『読書人』7.26号の「2024年上半期の収穫」コーナーに掲載。感謝申し上げます。

奈良敏行(発行人)